

古墳時代後期の丹後

細川 康晴

1. はじめに

丹後地域は、古墳時代前期から中期にかけては、日本海側最大級の前方後円墳が所在し、注目を集めているが、ここでは大型前方後円墳の築造が停止した古墳時代後期の丹後地域の諸問題について整理し、今後の研究の指針としたい。

2. 後期の首長墓

(1) 後期初頭の様相

丹後地域における古墳時代後期の開始は、須恵器によれば、小池5号墳(京丹後市大宮町)、西小田5号墳(京丹後市丹後町・弥栄町)、奈具岡遺跡S11土坑(同市弥栄町)などを後期初頭の古墳として区分できる。これらの出土須恵器は、TK23型式並行期のものであり、丹後地域では、木棺直葬墳における須恵器の副葬の開始は、陶質土器・初期須恵器を含む奈具岡北1号墳(京丹後市弥栄町)に続いては、TK208型式並行期の須恵器を副葬する小池7・2号墳(京丹後市大宮町)に始まるが、TK23型式並行期になると副葬例および器種も増加し、この段階までは大阪南部古窯跡群(陶邑)の製品の搬入が目立つ。

後期初頭の前方後円墳の築造の実態は十分検討できる状態にはないが、中期中葉の黒部銚子山古墳(京丹後市弥栄町・墳丘長105m)を最後に、墳丘長100m以上の大型前方後円墳の築造は、停止されている。

(2) 墳形と規模、外表施設

丹後地域では、後期に位置づけられる前方後円墳は、黒田2号墳(京丹後市大宮町)、新戸1号墳(京丹後市大宮町)、がんじあん2号墳(京丹後市峰山町)などをあげうるのみである。後期中葉(TK10型式並行期)には、丹後地域で最大規模の古墳は、直径34mの円墳である太田2号墳(京丹後市弥栄町)で、外表施設としてV期の円筒埴輪を持つが、葺石を欠く。丹後地域では、ほかに後期(V期)の円筒埴輪を持つものは、佐濃谷川流域の妙見堂古墳(京丹後市久美浜町・直径約20mの円墳か)と野田川流域のタバカニ4号墳(野田川町・墳丘長約30mの前方後円墳か)の2例が知られているのみである。後期初頭～中葉におい

て墳丘長50m以上の前方後円墳がまったく見られないことは、隣接する丹波、但馬、若狭地域と比べ、きわめて異なった様相を示している。丹後地域の古墳時代後期には埴輪を有する墳丘長30m級前後の前方後円墳もしくは円墳の築造は、各流域に1基程度しか確認できない。後期後半には、さらに墳丘規模の縮小化傾向は著しく、装飾大刀(京丹後市湯舟坂2号墳・直径18m)や金銅装馬具(京丹後市西外古墳)、装飾須恵器(湯舟坂2号墳)を持つものでさえも、墳丘規模は直径20m前後の円墳であり、新戸1号墳の後円部直径である20mを大きく上回ることではない。

(3) 前方後円墳の消滅

前方後円墳の消滅については、竹野川流域では、最後の前方後円墳の1つとして新戸1号墳をあげうる。新戸1号墳は墳丘長35mの前方後円墳で、後円部に両袖式の横穴式石室を埋葬施設とするが、奥壁には石柵を有し、丹後地域における石柵導入の系譜の検討は大きな課題である。新戸1号墳の石室の奥壁の壁面構成は、奥壁幅一杯の大型石材で石柵をはさんで、上下2段に横積みするもので、奥壁2段積みによる。奥壁2段積みは、近畿中央の後期後半の大型横穴式石室に顕著に見られる奥壁架構技法であるが、丹後地域では、新戸1号墳とほかには上司古墳に見られるのみで、丹後の地域首長墓の中ではきわめて限定的にこの技法は導入されている。また前壁、奥壁上段が垂直に架構されることも後期後半(TK43型式並行期)の近畿中央の大型横穴式石室に共通する。

石柵と報告されるものは丹後地域ではほかに高浪1号墳(野田川町)、ゲンギョウの山1号墳(京丹後市弥栄町)があるが、高浪1号墳では石柵部を構成する板状石材は奥壁部には直接架構されず、奥壁部に接して配置した石材を横積にした板状石材で支える構造である。ゲンギョウの山1号墳では奥壁から手前に離れて2段に平積みされた石材と奥壁部により形成される空間には土が充填されている。これら3例のうち奥壁に直接1枚の板石を架構する岩橋型の石柵に類似する構造を持つものは新戸1号墳のみである。また、高浪1号墳では柵状部上面からは管玉が出土し、柵状部上面における奥壁平行葬が想定される。さらに、ゲンギョウの山1号墳では、奥壁幅1.0mであるため奥壁平行葬の実施は困難であるが、柵状部上面で刀子が検出され、これらの柵状部は遺骸の安置もしくは副葬品の配置にかかわる空間として設置されたものであると考えられる。一方、新戸1号墳に見られる奥壁に直接板石を架構する岩橋型に類似する石柵は、府内の南丹波地域に後期前半から後半にかけて集中して継続的に導入されている。特に導入期の拝田16号墳では用材まで小型板状石材を用い、石室構築に紀伊の石室構築工人が関与している可能性が高い。

新戸1号墳築造の契機は、奥壁2段積みと前壁、奥壁上段が垂直に架構されることから、近畿中央の大型横穴式石室における石室構築技法と密接な関係があり、一方で岩橋型

の石棚を導入していることは、紀伊とのかかわりの深い大和盆地北西部、あるいは南丹波地域の勢力との密接な交流があるものと考えられる。

新戸1号墳では、石室内から採取された金銅装格子楕円文鏡板付轡、雲珠、玉類などが知られ、須恵器の出土は知られないが、これらの採集品と石室の構造からおおむねTK43型式に並行する時期に築造されたものと考えたい。

新戸1号墳に近接して、黒田2号墳が存在するが、表面採取された須恵器はTK10型式新段階に並行するものである。また墳形からも、黒田2号墳は新戸1号墳に先行するものであると考えられる。隣接する黒田1号墳は横穴式石室の可能性が高く、黒田2号墳の埋葬施設も横穴式埋葬施設である可能性がある。奥大野地域については、黒田2号墳、新戸1号墳と2世代にわたり連続して、横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳を築造した地域として、丹後地域でも唯一の地域であるとすれば、古墳時代後期後半の野田川流域から竹野川流域への交通路を考える上でも、きわめて重要な地域となる。

また、がんじあん2号墳(京丹後市峰山町)は、墳丘長25.6mであり、周辺に横穴式石室を埋葬施設とする円墳が存在するものの、基本的には単独墳である。竹野川流域での最後の前方後円墳の候補のひとつにあげうる。

一方、川上谷川流域や佐濃谷川流域、及び野田川流域では、後期後半(TK43型式並行期)において装飾大刀(湯舟坂2号墳)や金銅装馬具(上野1号墳)を持つものでも、円墳であり、前方後円墳の消滅は、竹野川流域の上・中流域(大宮・峰山盆地)を除き、TK43型式並行期において急速に進んだものと考えられる。

(4)古墳の消滅

丹後地域における古墳の消滅については、横穴を除き、横穴式石室墳の築造の下限は飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式であり、飛鳥Ⅲ型式に新たに築造されたものは知られていない。飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式の横穴式石室墳のうち墳形の確認できるものは、千原2号墳(岩滝町・1辺18m)、上司古墳(加悦町・13×12m)、上野2号墳(京丹後市丹後町・1辺13×8m)、解谷2号墳(岩滝町・9×7m)など、いずれも方墳であり、墳丘規模にかかわらず、この時期に多くの古墳の墳形が円墳から方墳へと変化している。

千原2号墳では、金銅装の毛彫文を施す帯端金具、帯飾金具が出土している。千原2号墳では、轡、杏葉などの馬具と特定できる製品は共伴していないが、この種の金具は、花弁形の杏葉を伴い、三重県以東の東海～中部・関東・東北地方に分布する金銅装の透彫または毛彫文を施す特色ある馬具の一部を構成している。千原2号墳例はこの種の金銅装金具の分布の西限に位置し、野田川河口部(阿蘇海沿岸)の古墳時代終末期における東国との交渉を考える上できわめて重要である。

また近年、天徳6号墳(京丹後市大宮町・石室奥壁幅0.54m)、解谷1号墳(岩滝町・石室奥壁幅0.6m)など、墳形・規模などは不明ながら、石室奥壁幅が0.6mというきわめて狭小な横穴石室が確認された。奥壁幅0.6mという単位は、木棺の使用はおろか人体を埋葬する上で必要最低限の幅となり、追葬を前提としない単次葬墓であることが明らかである。天徳6号墳については小規模な無袖型石室ながら開口部に列石を伴う単独墳である。丹後地域における古墳の終末は、地域首長墓では列石を伴う方墳へと墳形が変化し、小規模墳では単次葬墓化が著しく進んでいることが明らかとなった。

3. 横穴式系埋葬施設の導入

(1) 導入期横穴式系埋葬施設の3種

丹後地域における横穴式系埋葬施設の導入は、北部九州系横穴式石室と竪穴系横口式石室及び畿内型横穴式石室の3種の埋葬施設に分けて整理することができる。

北部九州系石室は、野田川流域のみに見られ、後期中葉(TK10型式古段階並行期・宮津市霧ヶ鼻10号墳など)に導入されている。竪穴系横口石室及びその後続墓制は、後期前半(MT15型式並行期・京丹後市網野町離山古墳)から離湖周辺に集中して分布し、その特色を強く残す後続墓制は後期後半(TK43型式並行期・京丹後市峰山町今井古墳など)まで続く。また、畿内型石室は、片袖式は川上谷川流域が早く、後期中葉(TK10型式古段階並行期)には導入されているが、竹野川流域や野田川流域は若干遅れ、後期後半(TK10型式新段階並行期)に導入されている。

北部九州系石室は北部九州型石室の属性である両袖式を取り入れ、玄門部に立柱石を用いるが、袖部は左右非対称で、両袖式でありながら片袖傾向の強いものとなっている。この石室型式は北部九州型石室を基本に畿内型片袖式石室の影響を受けて成立したものと考えている。北部九州系石室を導入している古墳はいずれも小規模な円墳で、素環鏡板付轡(入谷西A1号墳)のように馬具を持つものもあるが、鏡板・雲珠・杏葉などの金銅装馬具は含まない。

竪穴系横口式石室及びその後続墓制は、前壁の有無を確認できるものが皆無であるのでこれを区別することは困難であるが、奥壁幅について整理すると、A類として奥壁幅1～1.16mのもの(離山古墳、遠所31号墳、霧ヶ鼻11号墳)、B類として奥壁幅1.25～1.54mのもの(遠所2・1・27号墳、今井古墳、新ヶ尾東10号墳)の2類に分けて考えることができる。A類はMT15型式並行期(離山古墳)～TK10型式古段階並行期(霧ヶ鼻11号墳、遠所31号墳)など初現期のものに限られ、B類はTK10型式古段階並行期(遠所2・1号墳)～TK43型式並行期(今井古墳、新ヶ尾東10号墳)などA類よりも若干新しい傾向にある。A・B

類ともに幅1.6m未満であるので、いずれも奥壁平行葬による棺体配置ではないが、B類は奥壁直交2棺並列葬が可能な奥壁幅で、A類は奥壁1棺配置によるものであるとすれば、棺体配置の違いが奥壁幅を決定しているものと考えられる。また、開口部と玄室の段差は、A類で20～30cm(2段積)、B類で35～50cm(2～3段積)で、むしろ新しいB類において段差の高さを増している。B類の中には遠所2号墳(金銅装鞍金具)や遠所1号墳(鉄製素環鏡板付轡)のように馬具を副葬するものがあり、B類石室の造営主体には群集墳の盟主墳を含んでいる。

これら3種の横穴系埋葬施設は、前方後円墳ではない円墳、多くは群集墳を構成する古墳にまず導入されている。しかし、古墳時代後期前半～中葉の丹後地域の首長墓の墳丘規模自体が縮小することを考えれば、離山古墳(縦穴系横口式石室系A類・直径15m・単独墳)、遠所2号墳(縦穴系横口式石室系B類・直径17m・金銅装馬具・群集墳)、入谷西A1号墳(北部九州系石室・馬具・群集墳)、崩谷3号墳(畿内型片袖式石室・直径16m)など、直径15～17mの円墳もしくは、馬具を持つものが含まれ、丹後地域の横穴系埋葬施設の導入については、必ずしも小規模古墳ばかりではなく、群集墳の盟主墳あるいは小地域の首長墓が含まれているものといえよう。

竹野川上～中流域(京丹後市峰山町・弥栄町)、及び佐濃谷川流域では太田2号墳、桃山1号墳、大耳尾2号墳など地域首長墓の埋葬施設は木棺直葬墳が主流である。等質的な2～3棺並列埋葬を行い、横穴系埋葬施設の導入の基盤は十分であったにもかかわらず横穴系埋葬施設は後期後半(TK10型式新段階並行期)にいたるまで導入されない。

3つの型式の違いは横穴系埋葬施設の導入元(地域勢力・工人集団)の違いを示すものと考えられ、古墳時代後期の丹後地域の政治的地域間交流を探る重要な視点となる。

(2) 畿内型両袖式石室の導入

畿内型両袖式石室については、川上谷川流域(平野古墳)、竹野川流域(新戸1号墳)、野田川流域(高浪1号墳)ともにTK43型式並行期に導入される。野田川流域の高浪1号墳と竹野川流域の大成8号墳では、奥壁構成はじめ側壁の用材、袖部における柱状石材の利用、羨道部がハの字状に開くなど石室構築技法にきわめて強い類似を示す。高浪1号墳の石棚部分を除外した玄室平面形は大成8号墳と相似形であり、両者の石室構築技法には流域をこえて強い共通性が認められ、同一工人集団の架構によるものと考えられる。

(3) 横穴

丹後地域では、横穴が多く築かれているが、特に竹野川流域では、調査の機会の粗密も考慮した上でも、とりわけ上流域右岸の京丹後市大宮町周枳・三坂地区に集中している。初現期はTK209型式並行期にさかのぼり、玄室平面形が両袖式のもと無袖式のものがあ

る。盛期は飛鳥Ⅲ型式並行期以降で、平城Ⅲ型式並行期にいたるまで、新たに開掘している横穴も見受けられることと、一方では群内に隣接して、火葬墓が営まれていることが、他地域には見られない大きな特色となっている。大田鼻横穴群では、初期のものに金銅装の刀装具を持つものや、平城Ⅲ型式並行期のものに墨書土師器を持つものがあり、被葬者に小地域の首長や識字層を含む。土器の型式は、飛鳥Ⅱ型式並行期以降、須恵器は律令的土器様式を模倣しており、土師器にも一部その傾向がある。大田鼻横穴群に見る土器様式は丹後地域においては一般的なものではなく、隣接する左坂・有明・里の前横穴群出土品がむしろ在地的である。奈良時代の丹後地域では、須恵器についての生産地の同定は課題であるが、大田鼻横穴群には対岸のアバタ窯跡の製品は1点も供給されていない。

4. 群集墳の群構成

(1) 木棺直葬墳の群構成

A 等質型(小池古墳群・中期前葉～後期中葉)

群の形成が中期に始まり、後期初頭(T K 23型式並行期)を盛期として、後期中葉(T K 10型式並行期)には、他の墓域へ移動している。

B 盟主墳内包型

B 1 連珠型(遠所古墳群、天王山古墳群、谷垣古墳群)

やや大型墳を含む小支群が複数集合し、群を形成する。遠所古墳群では、後期初頭(T K 47型式並行期)から群形成が始まり、後期中葉(T K 10型式並行期)に盛期を迎え、主尾根上の支群のみ、後期後半(T K 43型式並行期)に造墓を行う。

B 2 魚骨型(左坂古墳群、入谷西古墳群)

丘陵稜線上に立地するやや大型の盟主墳を中心に、支尾根に向かって、等質的な小型墳が、放射状に群を形成するもの。この類型はB 1類型が複数単位複合したものである。左坂古墳群、入谷西古墳群ともに、弥生時代後期から造墓を行っているが、左坂古墳群C支群では、中期中葉から造墓が開始され、丘陵先端に後期初頭(T K 47型式並行期)～後期中葉(T K 10型式並行期)の古墳が築造される。D支群では中期末(T K 208型式並行期)～後期後半(T K 10型式新段階並行期)、E支群では後期前半(M T 15型式並行期)～中葉(T K 10型式古段階並行期)の造墓が確認されている。左坂古墳群における支群ごとの形成順序は、支尾根については、古墳時代中期末から後期中葉にかけてはおおむね丘陵先端から順次上方に向かい築造されているが、主尾根部分が未調査であるため、支群の形成契機となった古墳の築造時期も含め、群形成の過程の復原にはなお検討課題も多い。

入谷西古墳群では、丘陵先端に、群形成の最終段階の後期中葉に北部九州系の横穴式石

室墳が築造されるが、これ以降横穴式石室墳は同一丘陵の南斜面に墓域を移している。

(2) 横穴式石室墳の群構成

C 丘陵稜線型(広川古墳群)

数基からなる石室墳が丘陵稜線上に等間隔で分布する。丹後地域では加悦谷の野田川右岸にのびる丘陵稜線及び斜面に典型的に認められるほか、各地に多く見られる。

D 散在型(高山古墳群・TK43型式並行期)

数基からなる石室墳あるいは支群が、かなりの距離(100m以上)を置いて分布する。高山古墳群ではTK43型式並行期からTK209型式並行期にかけて群が形成される。高山古墳群では奥壁幅2m以上の1・12号墳を含むが両袖式の石室は含まない。

E 密集型(入谷古墳群、大成古墳群)

丘陵斜面または台地上に密集して立地する。

E1 密集度の極端に高いもの(入谷古墳群・TK43型式並行期)

入谷古墳群は、丘陵南斜面に密集して分布し、密集度は丹後地域の横穴式石室による群集墳のうちで最も高い。採集された須恵器の中にはTK43型式並行期のものを含み、入谷A1号墳に直接後続し墓域が移動したものである。入谷古墳群では群中最大規模の15号墳の奥壁幅は1.75mであり、群中には奥壁幅2m以上の石室及び両袖式の石室は含まない。

E2 密集度の高いもの(大成古墳群・TK10型式新段階並行期)

大成古墳群は台地に3支群に分かれて分布し、支群間にはやや距離があり、支群内の密集度も入谷古墳群に比べて低い。竹野川河口部はもとより、丹後地域全体の中で、横穴式石室のみによる群集墳として群の形成が最も早い。畿内型片袖式石室の導入(7号墳・TK10型式新段階並行期)を契機として群の形成が始まったものと思われる。8号墳は両袖式で奥壁幅2.5mを測り、大成古墳群は丹後地域における横穴式石室による群集墳で唯一両袖式石室を含む。群の構成は等質的な規模の円墳により、周辺には直接先行する木棺直葬墳や単独の同時期の大型古墳は存在しない。中期中葉の大型円墳である産土山古墳の隣接地に墓域が選定されたことは、群形成の契機を考える上で重要である。E2(高密度)とD型(低密度)の密集度の差は、D型が時期ごとに墓域を群集群内で小移動させたためである可能性もあるが、むしろ支群の継続的な形成が活発でなかったため前後に連続する古墳が築造されなかったとも考えられる。E1(超高密度)とE2(高密度)型の密度の差は、E2型がきわめて短期間に群形成が行われた結果か、もしくは、E2型には階層の高い両袖式石室及び奥壁幅2m以上の石室が全く含まれないことから、造墓すべき墓域の範囲がきわめて限定的に制限された結果であった可能性もある。

5. 副葬品の検討

(1) 須恵器の副葬

T K 23型式並行期の須恵器を副葬する古墳は、小池5号墳(京丹後市大宮町・蓋杯2組)、奈具岡遺跡S11号土坑(京丹後市弥栄町・蓋杯2組、無蓋高杯1)、西小田5号墳(京丹後市丹後町・甕2組)などがあるが、須恵器の導入は器種ごとに時期別において段階的である。以下、資料の豊富な竹野川流域を例に整理する。

中期末～後期初頭(T K 208～T K 47型式並行期)には大小の甕のみが副葬される。(小池7・2号墳、西小田5号墳)また、後期初頭(T K 23～47型式並行期)には、蓋杯2組もしくは、有蓋短脚高杯2組のセットに無蓋短脚高杯が加わる(奈具岡遺跡S11号土坑、遠所21号墳)。

後期前半(M T 15～T K 10型式並行期)の桃山1号墳では、蓋杯2～3組に加え、無蓋高杯は長脚1段高杯に変わるが、有蓋高杯は短脚のものが残る。また、蓋杯に大型のものと小型のもの、法量の異なる2種が同一主体部内でも共伴し、これらは胎土も異なる。太田2号墳では、新旧の型式の甕が共伴するが、無蓋高杯の型式は、3種に及ぶことが注目される。すなわち杯部に櫛描波状文と櫛列点文を施すものと無文のもの、脚柱部に小型円形透かし孔をもつものである。このうち円形透かし孔のものはこの時期以降新たに出現する型式である。また、杯部に施文するものは、桃山1号墳出土のものと胎土が酷似し、同一産地で生産された可能性が高い。

(2) 装飾須恵器

大耳尾2号墳では、須恵器角杯が、大耳尾1号墳では、装飾付甕が出土している。いずれも共伴する須恵器からは、T K 10型式に並行するものである。兵庫県明石市赤根川・金ヶ崎窯跡では、灰原から須恵器角杯形及び装飾付甕が、溝状遺構からは、角杯形が出土している。灰原出土須恵器は、M T 15～T K 10型式並行期のもので、溝状遺構出土須恵器もまた、M T 15～T K 10型式並行期のものを含む。第1次窯体内出土須恵器もまた、M T 15～T K 10型式並行期のものであるが、型式学的には、第1次窯体内出土須恵器よりも古い型式のものを含み、さらに複数の窯跡の存在も想定されている。大耳尾古墳群出土の角杯形及び装飾甕は赤根川・金ヶ崎窯跡のものとそれぞれ形態は異なり、角杯形は先端が平坦な部分の面積が大きく、より形式化している。また装飾甕も肩部の施文が波状文で、肩部及び底部もより丸みを帯びている。また肩部の動物も大耳尾では鹿状である。このように、大耳尾古墳群と赤根川・金ヶ崎出土品は同一型式とは言えず、型式的にはむしろ前後の関係におかれるべきものであるが、大耳尾古墳群の須恵器の産地を同定する上できわめて密接な関係を持つものとして注目されよう。これまで、角杯形須恵器については、入江文敏

氏の研究により、生産地である福井県興道寺窯跡から岐阜県陽徳寺古墳への供給が確認され、6世紀前半における若狭と美濃の首長間の密接な関係が想起されたが、ここに、播磨と丹後、若狭の特定地域首長間の個別の政治的交流関係が存在した可能性を指摘したい。

6. まとめ

古墳時代後期の丹後は、大型前方後円墳が築造されず、埴輪を有する古墳は佐濃谷川、竹野川、野田川の各流域に1基ずつで、後期初頭から前半には丹後地域の多くの小地域では前方後円墳の築造自体が断絶した状態で始まっている。一方、後期初頭(T K 23型式並行期)には大阪南部古窯跡群(陶邑)から小規模古墳に搬入される須恵器が見られ、小池古墳群など、この時期までに造墓が活発化し、終息するものと遠所古墳群など、この時期からあらたに造墓を開始する地域も出現する。

後期前半から中葉(M T 15～T K 10型式古段階並行期)には、横穴系埋葬施設の3種が導入されるが、竹野川中流域・離湖周辺では竖穴系横口式石室及びその後続墓制が集中的に分布し、特に奥壁幅が広いB類は金銅装馬具を持つものを含み、築造階層には群集墳の盟主墳を含む。さらに竹野川流域の中で、B類の分布は周辺に拡散し、後期後半(T K 43型式並行期)にまで継続してその影響化に成立した後続墓制が採用される特色ある地域である。一方では、竹野川流域は、角杯などの装飾須恵器に見られるように、近畿中央以外の若狭、播磨などの地域首長と個別に密接な政治的交流を持ち、横穴式石室は後期後半(T K 10型式新段階並行期)に至るまで導入されない。角杯が新羅起源であることから、若狭、播磨、丹後(竹野川流域)の諸地域の、この時期の対外交渉先として、百済だけではなく、新羅志向であった可能性もあり、竹野川流域については、とりわけその傾向が強い地域であったものと考えたい。

一方、野田川流域については、後期中葉(T K 10型式古段階並行期)に丹後地域の中で唯一北部九州系石室が導入される。この石室型式の導入に当たっては、構築には北部九州の石室構築工人の関与が想定できる。同時にまた片袖傾向の強いことから、畿内型片袖式石室の影響も強く受けている。しかし、この石室型式は、その後に継続、拡散せず、断絶している。入谷西古墳群では、入谷古墳群として、丘陵稜線上から丘陵斜面へと墓域を移動するが、両袖式石室を含まず、墓域の移動とともに狭小な範囲に高密度に造墓されており、強い規制の下に群が形成されたものと考えられる。

また、これまで、前期～中期を通じて、大型の前方後円墳が築造されなかった川上谷川流域では、後期中葉(T K 10型式古段階並行期)に丹後地域の中では、最も早く、畿内型片袖式石室を導入し、続いて畿内型両袖式石室を導入し、近畿中央との結びつきを急速に深

める。しかし、湯舟坂2号墳の環頭柄頭が近畿中央に多い単龍ではなく、日本海側に多く分布する双龍式であることは湯舟坂2号墳の被葬者の近畿中央における軍事的位置と、角杯形須恵器の副葬以後、後期後半にさらに新羅への傾斜を強めた可能性がある。

(ほそかわ・やすはる＝京都府立丹後郷土資料館主任)

参考文献

須恵器の型式は、

田辺昭三『陶器古窯跡群』(平安学園考古学クラブ)1966

古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』1992、

埴輪の型式は

川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2 日本考古学会)1978によりました。

須恵器の年代観については、

拙稿「丹後における木棺直葬墳出土須恵器の再検討」(『太邇波考古学論集』両丹考古学研究会)1997、

横穴式石室の構造については、

拙稿「横穴式石室の導入と展開」(『季刊考古学・別冊10丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣)2000

また、

(角杯)入江文敏「若狭地方における首長墓の動態」『福井県史』資料編13 1986

(環頭大刀)久美浜町教育委員会編『湯舟坂2号墳』1983

(馬具)『千原古墳・弓木城跡』岩滝町教育委員会 1984

(横穴式石室)奈良女子大学編『金屋上司古墳発掘調査報告書』2001

などを参考にしました。その他、多くの発掘調査報告書を参照させていただきましたが、紙幅の都合により割愛させていただきますので御寛容ください。

第1表 丹後を中心とする後期古墳の編年

時期	須恵器	久美浜		竹野川		野田川		栗田・舞鶴湾	北丹波	南丹波	岩張	但馬	山城	参考
		川上谷川	佐瀬谷川	河口部	中流 (郭宋・藤湖周辺)	上流 (中野谷地)	河二部	上流 (加悦谷)						
後期初期	T K 23 型式並 行期		○ (妙見堂)		西小田5	小池5		○ (タベカニ4)	高谷6	☆ (千歳車塚)	☆西塚 ☆ (下船塚)		☆都塚	高井田山
後期初期	T K 47 型式並 行期		南谷C 6	石ヶ原7	奈良谷1 遼所21 遼所19			○七面山	☆高瀬茶臼山	井田10 今林2	☆ (十善の森)		天竺堂 曹山2	☆崎玉福壽山 (大谷) ☆番塚 ☆ (岡行丸) ☆江藤山
後期前期	M T 15 型式並 行期		南谷B 1・4 (南谷3)		龍山	帯城3			☆龍龜山10	北ノ庄14 北ノ庄13 ☆ (井田16)	☆獅子塚 ☆ (上船塚)		☆二子塚 ☆天塚 ☆曹山1	☆市尾山 ムネサカ4 ☆大谷山6 ☆花山6 ☆大谷山22 ☆岩戸山
後期中葉	T K 10 型式古 段階並 行期	崩谷3	天王山B 1 天王山A 5 谷垣3		遼所9 遼所31 遼所2 岡3・2 くらがり	○太田2 ○大耳尾2・1 桃山1 太田4 池田3	倉庫山1 霧ヶ鼻11 霧ヶ鼻10 霧ヶ鼻6	船山1	浦入西2	医王谷3 小谷17	丸山塚	觀音塚	☆物集女事塚	☆龍龜山 ☆今城塚 ☆南塚 ☆西宮山 ☆王塚
後期後半	T K 10 型式新 段階並 行期	崩谷1 陵神社12		大成7	遼所1	☆黒田2 坂野4	霧ヶ鼻8	入谷西A 1	小田	池の奥4 高谷3 流尾 (長者森)	大谷	禁裡塚		☆大和二塚
後期	T K 43 型式並 行期	川向1 (中野) 畑大塚2 湯井坂2		上野1 高山1 高山7・4	遼所27 新ヶ尾東10 スクモ塚28	今井 (大谷) (西外) ☆ (新戸)	高浪1 休場	喜多家奥	☆牧正一 奉安塚 山尾北	井田8・9 小金岐76		☆見手山1 (塚山) (西の岡)	大蔵寺3	☆島土塚 平群三里 藤ノ木 牧野 ☆こもり塚
後期末葉	T K 209 型式並 行期	アノ田2 経塚 畑大塚1	塚井谷2	大成8 高山12・5 高山3・6 大成9	墓ノ谷12 岡1	低石場西1 大田嶺 桃谷	解谷3 河ノ辺1 (入谷11) (入谷14)	神谷3 下山49 細谷1 山根	小金岐17・71・1 坊田5 医王谷1	小倉坂17・71・1 双ヶ丘1 (コウモリ塚)		真谷2 二見谷1 (コウモリ塚)	今里大塚 双ヶ丘1 ☆ (使塚)	☆見瀬丸山 赤坂天 王山 ☆岡田山1
最終末期	T K 217 型式並 行期			上野2	奈良岡南5 (ゲンギョウの山11)	天徳6	千坂2 解谷1	(入谷15) 上司	舟材 細谷2	小倉坂9・4・6 桜峠18				石舞台 岩屋山

※女前方後円墳または前方後方墳 ○直径20m以上の円墳または方墳または円輪あり () 須恵器未出土

